
第 11 章 遅い小学生時代 V : 1952 年夏～1953 年夏 (16 歳)

名残惜しい日々、帰路に就く

フランス滞在中、アウレフから私に一通の手紙が届いた。手紙には、1911 年にアウレフを離れ今はパリにいるという大叔父（訳注：祖母の兄弟。祖父ハマジがガルダイアで亡くなった時居合わせた人。）の住所が書いてあり、出来るならその大叔父に連絡を取ってくれとあった。私大叔父に手紙を書いたところ、彼からは電報で返事があり、それによると、今病気で動けないので私に会いに来ることは出来ないとのことだった。この返事に私はがっかりしたが、どうしようもなかった。そうこうするうちに、オセールを離れる日が近づいて来た。出立の日は 9 月 20 日に決められた。おかしなもので、私は雷に打たれたようなショックを受けた。私は、フランス滞在が長くなるにつれて、いつの間にか、ずっとここにいて、この地で学校を卒業できるような錯覚に陥っていたのだ。よく考えたらバカな話だった。第一、両親やタレブにした約束はどうするのか？私は自分に言い聞かせた。フランスはどこにもいかない、神が私に長寿をおゆるし下されば、また来ることが出来る、と。私はバカンス村を後にし、シャンプールンに戻った。

シャンプールンでは私のためにお別れ会をしてくれた。そして私は、ユーゴ先生一家、すなわち夫妻と、彼らの子供たちのダニエル、エリザベット、ジョルジュと一緒にマルセイユ行きの列車に乗った。復路は、船で地中海を渡った。船の名は「シディ・フェルシュ (Sidi Ferruche) 号」といい、アルジェまで 24 時間一昼夜の旅だったが、船内では辛く不快な思いをした。乗客はそれぞれ甲板上に長椅子を割り当てられていたが、程度の差こそあれ、ほとんどの者が船酔いし、疲れと嘔吐で顔を醜くゆがめていた。どこまでも続く大海原を見ていると、この航海は永久に続き、二度と陸地には着かないんじゃないかという気さえして来た。船内では二回食事が出たが、疲労と気持ち悪さのために、とても食べる気にならなかった。第一、乗客の吐いたものが悪臭を放っている傍で食事をしろというのも無理な話だろう。私は、こんな難儀な思いを一生しなければならいなんて、船乗りの人たちは気の毒だなあ、と同情した。今回は、マルセイユからアルジェまでだったから、この程度で済んだが、これがもし日本やアメリカ、あるいはインドネシア、更にはオーストラリアへの航路だったなら一体どうなっていただろう。考えただけで気が遠くなった。



アルジェリア北岸、アルジェ港近く。海は穏やかなことが多いのですが。(2002 年訳者撮影)

夜が明け、到着を知らせるアナウンスが流れた。朝日が昇り、遠くの方にかすかにアルジェの街が見えて来た。船が少しずつ岸に近づいて行く。アルジェ湾の背後の丘を、虫のように小さな車がたくさん走っていた。互いにすれ違い、交差し、時には一台の車が別の一台の中に入って行くかのように見える。もちろんこれは、目の錯覚である。更に岸壁が近づいてきた。ここでも私の目は錯覚を起こし、なんだか船が岸壁に接近しているのではなく、岸の方からこちらに寄って来たように見えた。湾に入ってから船の速度は亀のように鈍く、完全に接岸するまで 1 時間ほどもかかった。乗客たちは甲板の手すりにもたれて、今か今かと下船の時を待っていた。やっと下船だ。乗客たちは皆、酷い拷問でもされた後のように顔を歪め、両手に重そうに荷物を下げながら降りて行った。港の敷地から出たところで一台の大きな車が待っており、運転手は私たち一行をそのまま真っ直ぐムーレ (Mourrai) 大尉のヴィラへ連れて行った。大尉は休暇を、奥さんと二人の娘たち、シャantalとエリザベットと過ごすために、アルジェ近郊の森の中にヴィラ (別荘) を借りていた。その夜、私はヴィラの庭に組み立てた小さなテントの中で眠った。



アルジェ港 (2002 年記者撮影)

5 か月ぶりの沙漠

翌朝私はユーゴ先生一家と別れ、ケナドサの父の所へ行くために、コロン・ベシャル行の列車に乗った。ユーゴ先生たちは、アルジェにまだ数日留まるというので、後でコロン・ベシャルで落ち合い、そこから一緒にアウレフへ戻ることになった。私は往路と同じ路線を逆に辿り、ペリグーで西行き列車を降り南行きのそれに乗り換えた。全て順調に運び、約 24 時間後コロン・ベシャルへ到着した。そこでもまた往路と同じように、メリアムの家に休ませてもらいに行ったが、もうよく道が分かっていたので、一人で迷うことなく彼女の家を見つけることが出来た。私が無事に戻って来たので、メリアムの家族は喜んで色々ともてなしてくれた。その日はコロン・ベシャルに泊まって、翌日父のいるケナドサへ行き、ユーゴ先生たちと落ち合うまでの数日を過ごした。幸い、約束の日には無事ユーゴ一家と再会できたので、私たちはそろって南深部へ旅立った。アドラール行きの SAAT 社のトラックの旅は相変わらず辛く長かったが、今回はみんなと一緒にだったので気分的にはずっと楽だった。

途中ケナドサに着くと、めずらしく雨が降った後らしく、普段は涸川のウエッド・サウラ (Oued Saoura) に水が流れ、そのせいで道路が寸断されていた。南側の向こう岸には、アドラールから来た人々が立ち尽くしていた。結局水が引くまで、それから約 48 時間もかかった。足止めを食っている人々の中には、反対岸の知り合いへ食糧を分けようと、パンや果物を投げる者もあった。川の幅は大きくはなかったものの、投げたものの 3 分の 2 は空しく水に落ちた。時々根こそぎになった木も流れてきた。まっすぐ立ったままだったり、横向きに浮いていたり、中には上下逆になって根っこの方を空に向けて浮いているものもあった。さらには驚いたことに、ヒツジやヤギまで、仰向けに水に浮いて、脚を宙にバタバタさせながら流れてきた。水位が 50 センチほどに引いた時、トラックの運転手は、もう大丈夫そうだとふんだらしく、向こう岸へ渡ると決めた。思いがけず長い足止めを食った

ので、運転手としては一刻も早く失った時間を取り戻したかったのだろう。アドラールはまだ 350 キロも南の彼方だった。

「食べ物を持参している者はトラックの上で食べてくれ。アドラールに着くまでノンストップで行くから。」と運転手は宣言した。

後から思うと私たちは、この時の強行軍によく耐えたものだと思う。でこぼこ道で激しく揺さぶられ、ある者は顔を、ある者は頭を、右に左に、あるいは前や後ろにぶつけた。アドラールへは午後になって着いた。ユーゴ先生は、現地の知人に頼んで、アドラールの役所の宿舎に泊めてもらえるよう話をつけた。この夜の食事は、暖かくこそなかったが、長旅で酷く疲れた後だったので、十分においしく感じられた。



イメージ画像：マトリウンヌ村のワジ（涸川）。白く塩を吹いている所が川床。貯水池を造ってあったが、前回の降雨で予想以上の洪水となり決壊したとのこと。このように、沙漠の雨は稀であるが、降るとなれば侮れない。(2002 年記者撮影)

翌朝はいつもよりは遅く、朝の 8 時ごろ、再び同じ会社のトラックの荷台に乗り込み、私たちはアドラールを出発した。アウレフには午後の 3 時ごろ到着した。私はとりあえずユーゴ先生の社宅へ一緒に行き、少しそこで休んでから自分の家へ向かった。家族は私が今日帰ってくることを知らないはずだから、きっとすごく驚くだろうなと思いながら道を歩いて行った。ところが、家までまだだいぶあるというのに、母がこっちに向かって走ってくるのではないか。母は泣いていた。母の後ろにアイーシャ叔母とゾーラ伯母が、さらにその後ろに妹のファートマの姿もあった。きっと、誰かが私の姿を見かけて、そのことを家に知らせたのだろう。私は、あっという間に家の女たちに取り囲まれ、キスの嵐を浴びた。みんな感極まって叫んだり泣いたりして、大変な騒ぎになった。ようやく我が家に着

いて腰を落ち着けると、今度は近所の人たちが私を見ようと、わっと押しかけて来た。彼らの相手をしている時、私は何度も知らず知らずのうちにフランス語で応えてしまった。5 か月間もフランス語しか聞かなかったのだから、自然なこととも言えた。若い時は、このように、外国語の吸収も速いのだろう。

ところで、私がアウレフに戻ったのは、新学期が始まる少し前の、確か 9 月 28 日くらいだったと記憶している。アルジェリア南部では学校は 10 月にならないと始まらない。1952 - 53 年度の新学期が始まるまでの数日間、私は家でよく休養した。この年度は私にとって、卒業試験を控えている、まさに決戦の年で、新学期が始まったら死ぬ気で勉強するつもりでいた。

卒業試験に向かって

新学期の始業式が行われた。校庭に生徒全員が整列し、駐留軍隊長の大尉、カイド、諸部族の長、街の名士も臨席した。はじめに隊長が短い演説をし、次に校長が話したが、二人の言葉はアブダラー・エル・ホジャさんが通訳した。来賓が帰ると、生徒は二人ずつ列になって教室へ入った。初日は説明だけだったので、学校はすぐ終わり、解散となった。この年は、カリキュラムが改正され内容が難しくなったので、生徒たちもいっそうの努力を要求された。なお、文系科目はユーゴ夫人が、理系科目はユーゴ校長が受け持った。

ある日の磁石に関する授業でのことだった。ユーゴ先生は、紙で鳥をこしらえ、それをコルクの板の上にくっ付けた。実はこの鳥の中には針が隠してあった。先生は、素焼きの大きな器の中に水を張り、その上に紙の鳥を浮かべた。次にパンの小片の中に磁石を埋め込んだものを 2、3 個つくり、一つずつ生徒に持たせ、鳥に差し出すように言った。生徒が言われた通りにすると、紙の鳥はパンをもらいに寄って来た。しかし、一人はパンを差し出しても紙の鳥は寄ってこなかった。この実験をしておいてから、ユーゴ先生は、磁極の仕組みや、方位磁石の針が何故正確に南北を指すのかを説明した。

それから約 20 年後、私は、インサラーとアウレフの間で道に迷った時、この実験を応用して難を逃れたことがある。私も、他の何人かの乗客も、一生懸命何か道標はないか探したが、どこにも何も見つからなかった。ふと昔のことを思い出して、私は一本の針を紙に刺し、仲間の一人の持っていた木の器に水を張って、それを浮かべた。針は、少しの間水面で揺れていたが、やがて一定の方角を指して止まった。つまり南北を指したのである。これによって私たちはインサラーからアウレフを結ぶ東西方向の道筋に戻ることが出来た。きっと、これを目撃した他の乗客たちは、知識の力がなんたるかを理解したに違いない。

新学期の授業は、確かに内容が難しくなっていた。私も持てる限りの力をもって臨んだ。1 月以降は模擬試験が行われ、生徒たちは筆記試験と、口頭試問を受けた。その結果を先生たちが厳しく審査し、本試に臨む候補者として、最も成績の良かった二人が選ばれた。一番がアーメッド・ベン・アブデルカデル・ベン・モクター（訳注：フランス留学でも一番に選ばれた生徒）で、次席が私だった。先生たちは、「君たちなら、きっと卒業試験に通る、この学校の名誉となってくれるよ。」と言ってくれた。そうして私たちの正式な願書が

提出された。私たち二人は試験直前まで受験勉強に励み、そして 4 月第 4 週、試験会場のあるインサラーへ向かった。

卒業試験は 3 日間連続で、毎日、午前 2 時間、午後 3 時間ずつ展開された。インサラーの駐留軍隊長のトマ大尉は、以前は教師をしていたそうで、自ら試験監督に当たり、また書き取り試験の文も自分が読み上げた。彼の正確な発音や心地よい声音は今でも忘れられず、目の前で彼が朗読している声がよみがえるようである。試験の内容は、書き取り、作文、文法、デッサン、暗算と筆算、それに体育の実技だった。全ての日程が終了すると、採点はコンスタンチヌで行われ、最終的な結果はコンスタンチヌ県の教育委員会が発表することになっていた。アウレフのフランス軍隊長の下に結果が届いたのは、試験から 10 日余りの後のことだった。私たちはユーゴ先生から結果を聞いた

「二人とも最高の出来だったよ。」とユーゴ先生は褒めてくれた。

しかし、私は内心ちょっとひねくれて、先生はそんなこと言ってるけど、どうせまた僕は二番目に違いないさ、と思った。実際、事実はその通りだった。コンスタンチヌの教育委員会から届いた書類にもそう書いてあった。

この年はユーゴ先生の任期の二年目で、学期が終わったらフランスに戻るようになっていた。フランス軍の隊長のところでささやかな合格祝いの式典が行われた。町の名士も何人か臨席していた。私たち合格者に賞状が授与され、隊長や賓客が祝辞を述べた。大尉は私の学友に言った。

「君の親は裕福なようだから、来学期からは北部へ行って勉学を続けなさい。」

一方私には、こう言った。

「君は無理だろう。コロン・ベシヤールにいる白衣修道会の神父の所へ行って、技術系の職業訓令を受けるといい。」

私は隊長の前なので、小さな声で遠慮がちに応えた。僕は、何か頭を使う仕事をするのが夢なのだ。

大尉は機嫌を損ね、しばしむっつり黙った後、再び言った。

「いいから言われた通りにしなさい。でなければ、もう勝手にするがいい。」

私は怖くなり、それ以上何も言えなくなった。隊長は構わず続けた。

「承知するなら、私からコロン・ベシヤールの神父に手紙を書こう。」

ユーゴ先生も何も言ってくれなかったのだから、私はもう、それでいいです、と応えるほかなかった。

長い夏休みがはじまった。ユーゴ先生一家もアウレフを離れた。今回は最終的な離任で、もうアウレフには帰って来ない。駐留軍の隊長は約束通り手紙を書いてくれ、その返事を待っている最中、郵便局から私に書留が来ているから取りに來いと知らせがきた。郵便局に行くと、係の人は私に一枚の用紙にサインさせ、そして円筒状の郵便物をくれた。中からは、何と云う喜びだろう、きれいな多色刷りの卒業証書が出て来た。これこそ私の夢の証だった。私はアウレフの子供で初めて卒業証書を手にした。皆珍しがって、私や級友のアーメッド・ベン・アブデルカデル・ベン・モクタールの所に卒業証書を見にやっ来て

た。今日だったら、誰かが博士号を取ったと言ったところで、相手は「そうですか」と肩をすくめるだけだろう。しかし、この当時は少なくとも、勉学の証は名誉に他ならなかった。60 年たらずの間に人は無感動とかエゴイストになり、儲け話の他には興味を失ってしまったらしい。学歴も、今ではいかに金を稼ぐかの方便としてしか見られていないのではないか。誰か、私たちは誤った道筋に入り込んでいると警鐘を鳴らし、修正をほどこすには今しかないと言ってくれる勇気ある者はいないだろうか。